

関谷喜三郎教授の定年退職記念特集の 発刊にあたって

日本大学商学部長 嶋 正

関谷喜三郎先生は、日本大学商学部助手を経て、1978年4月に商学部専任講師に就任されました。その後、1984年4月に助教授、1997年に教授に昇格され、本年3月に退職されるまでの長きにわたり、経済学担当の教員として、本学部の教育研究及び学内運営の枢要を担ってこられました。多大なる貢献に対しまして、ここに改めて心より深く感謝申し上げます。

先生は、学内運営では、企画担当（2003年1月～2003年8月）、就職指導担当（2007年5月～2013年3月）、商学研究所長（2012年10月～2015年3月）を歴任され、とりわけ就職指導担当として、景気低迷にあっても学生の進路指導に弛まず意を注がれていたお姿が強く印象に残っております。

学術研究では、著書13冊（共編著含む）、論文32編、学会発表15回、翻訳12編を数え、また、日本消費経済学会では、理事（2002年4月～2008年3月）、常務理事（2008年～2014年3月）、会長（2011年4月～2014年3月）をお務めになり、斯学の第一線で活躍されてきました。

近著『消費需要と日本経済』（創成社、2019年）では、景気回復には消費需要の安定的な増加が不可欠であると説かれ、若者の非正規雇用増加や産業間の賃金格差といった問題、また、女性の就業機会の拡大という課題に対して処方箋を示しておられます。まさに経国済民の情熱をご高著から窺い知ることができます。

教育活動では、学部においては「ミクロ経済学」、「マクロ経済学」及び「経済政策」、大学院においては「マクロ経済学特殊講義」を担当され、とりわけゼミナールでは、慈父のような暖かな愛情を注いでこられました。年の暮れにはご自宅にゼミ生を招かれて、餅つき大会を恒例にされていたというお話も伺っております。

先生の温厚篤実なお人柄が、一つには、大学時代に鶯咳に接した無教会派の宣教師の教えによることが、『砧通信』第49号（2020年）に掲載されたエッセイ「青春の道標」に書かれています。引用させていただきますと、「何を聞き、何を学んだのか。それは、一言で言うならば、『いかにして、策略なしにこの世を渡ることができるか』ということであったと思う」と。

46年間にわたり日本大学商学部の変遷をつぶさに見てこられた先生には、大学をめぐる環境が日増しに厳しくなる中、さまざまな面で学部発展のためご教示を仰ぎたく、今後とも何卒よろしく願い申し上げます。

最後になりますが、先生のますますのご健勝を祈念し、巻頭の言葉とさせていただきます。